

に来ていたが、冒頭以外は彼のボエーム
観と正反対の演奏をどう聴いただろうか。
(中 東生)



丁寧な、女性らしい指揮で聴かせたスカップッチの《ボエーム》©Judith Schlosser

Opera 話題の女性指揮者スカップッチが チューリヒで《ボエーム》を指揮

先シーズンのドニゼッティ《連隊の娘》
(演奏会形式)で素晴らしい棒さばきを見
せたスベランツァ・スカップッチを聴
きに、10月5日のブッサーニ《ボエーム》
再演にチューリヒ歌劇場まで出向いた。

運悪く、本番1時間半前に初めて声
が出ないことに気付いたというロドルフォ
役のベンジャミン・ベルンハイムの代わ
りに、デイヴィッド・キムが開演15分前
に劇場に緊急到着し、舞台端で歌のみ担
当したせいか、初めはオーケストラもぎ
くしゃくした。

美声のマルチェッロ、ユーリ・ユルチ
ュクと、身のこなしも軽やかなフー・モ
ンターギュ・レンドールのショナール、
コリーネのスタニスラフ・ヴォロビョフ
ら、3人とも初役とは思えない自然さが、
無声のロドルフォを上手く馴染ませ、何
よりも代役キムの甘い声と音楽性は幕が
進むほど花開いていった。

ミミのグアンケン・ユはモーツァルト
《イドメネオ》のエレットラの激しさが
記憶に新しいが、今回は落ち着いたミミ
をまろやかに歌った。ムゼッタのジョー
ジア・ジャーマンもステレオ・タイプの
お色気演出に耐えうる容姿と安定した歌
唱で好演した。

スカップッチの指揮は、音楽が止まっ
てしまうほど細部まで丁寧に歌わせ、女
性らしい優しさも随所に見られ共感を覚
えた。第2幕では合唱やバンダ(舞台裏
で演奏する合唱や楽器)と合わずに乱れ
たことは目を瞑っても、第4幕のロドル
フォとマルチェッロの二重唱がまったく
流れていなかったのが唯一不可解だっ
た。音楽総監督のファビオ・ルイジが観